同調動機尺度の開発のための予備的検討

―規範的影響と情報的影響を超えて―

ケイン聡一・中島健一郎・岡田 涼[1]

A Preliminary Examination for the Development of the Motivation of Conformity Scale -Beyond Normative and Informational Influences-

Soichi Kane, Ken'ichiro Nakashima & Ryo Okada

Recently, motivations for conformity, classified as normative and informational influences, have been questioned (cf. Kane et al., 2021; Smith & Haslam, 2017). If there are other essential motivations for conformity, the current classification method lacks content validity (Murayama, 2012). Therefore, this study aims to explore further motivations for conformity and statistically examine the validity of the new classification. For this purpose, a preliminary survey was conducted to develop a new scale, the Motivation of Conformity Scale, which classifies and measures conformity based on its motivations. First, an open-ended questionnaire was administered to identify existing motivations for conformity. Next, the sentences collected from the questionnaire were classified based on the KJ method (Kawakita & Makishima, 1970). As a result, the existence of five motives was suggested. Then, we created scale items based on the analysis results and the sentences. Next, to examine the scale validity, a questionnaire was administered to 273 university students, and an analysis was conducted. We examined scale validity based on Murayama's (2012) and Nakamine & Kamijo's (2019) arguments. The scale displays a degree of content validity, although further research and evaluation are warranted.

キーワード：Conformity, Scaling, Motivation, Adjustment, Mental Health

問 題

同調行動 (conformity) は「集団や他者の設定する『標準』または『期待』に沿った行動をとること」(横田・中西, 2010) と定義され，社会的影響 (social influence) の代表として，第二次世界大戦以後，半世紀以上にわたって心理学者達から大きな関心を向けられてきた概念である。同調行動の研究は，社会心理学を始め，進化心理学や発達心理学，教育心理学などの分野で盛んに行われてきた。

[1] 香川大学教育学部　学校教育教員養成課程　准教授

同調行動の分類方法として，特に欧米では Deutsch & Gerard (1955) 以降，規範的影響と情報的影響という 2 種類の動機による分類が採用されてきた (cf. Bond, 2005; ケイン・小池・中島, 2021)。規範的影響とは，多数派から受け入れられたい，他者から好かれていたい (嫌われたくない) という動機である。また，社会的排斥などの不利益を回避したいという動機に基づいて受けた社会的影響ともいえる。そして情報的影響は，他者からより正確な情報を得たい，正しくありたいという動機である。情報的影響による同調行動は，他者から得た情報を客観的な事実の基準，あるいは真実性についての根拠として受け入れた上での行動となる。つまり，現実に即したより妥当な反応をしたいという動機に基づいて受けた社会的影響といえる (e.g., Deutsch & Gerard, 1955; 北村・大坪, 2012; Smith & Haslam, 2017; 横田・中西, 2011; 依藤, 2003; 湯川・吉田, 2012)。

一方で近年，同調行動を規範的・情報的影響の 2 つのみで分類することへの疑問が投じられており，他の動機の存在を含めた再検討の必要性が指摘されている (cf. ケイン他, 2021)。本当に同調行動にこれら以外の重要な動機が存在するのならば，現行の同調行動に対する分類方法には妥当性の，特に内容的側面 (村山, 2012) に問題があることになる。Smith & Haslam (2017) によると，Asch (1955) において実験参加者が同調した理由は大きく分けて 3 種類ある。うち 2 つは，後に規範的・情報的影響と呼ばれる動機である。そして 3 つ目は，これまでの研究では扱われなかった動機である。Asch (1955) の実験参加者の内，何人かは「研究の結果を台無しにしたくなかった」と述べ，船を座礁させないように多数派に同調し，みんなの利益に沿うように行動したと信じていた。また別の何人かは，他の参加者たちは最初に誤った人物を馬鹿にしないために，つまり他者を排斥しないために同調したのだと考えていた。彼らの同調行動の動機は，不利益を回避したいという動機とも，より妥当な反応をしたいという動機とも質的に異なるものであり，他者や集団の利益を求めるという第三の動機に基づいて同調行動を自ら積極的に選択したのである (cf. ケイン他, 2021)。

ケイン他 (2021) はこの点に着目し，「他者や集団の利益を求める」という第三の動機に基づく同調行動が適応とポジティブな関連を示すことを論じている。さらに，第三の動機を抽出することで，社会心理学や発達心理学，進化心理学における様々な研究・議論から導出された，「同調行動により集団への適応が促され，その結果として個々人が適応感を有する」，言いかえれば，「同調行動を行うことで心理的安定や精神的健康の高さを獲得できる」という想定と，実証的な先行研究の結果が一貫しない問題を解決できる可能性を指摘している。まず，規範的影響による同調行動は，不利益の回避のために行われるが，この時，同調者は多数派が明らかに誤っていることを認識しており，かつ内的にはその意見に同意してはいない。つまり，表面的には同意しながらも，私的意見は変容せず，消極的な選択として同調しているといえる (cf. Smith & Haslam, 2017)。こうした同調行動は，その過程において自身の意見に対する抑圧を含んでおり，適応や精神的健康に対してネガティブな影響を持つと考えられる。実際，国内外の様々な研究で規範的影響による同調行動は精神的健康と負の関連を示している (e.g., Hamilton & Mahalik, 2009; 葛西・松本, 2010; 黒沢・森・寺崎・大場・有本・張替, 2002; Wong, Ho, Wang, & Miller, 2017)。また，情報的影響による同調行動はより正しい，妥当な反応を探索するプロセスであり，同調者が積極的な場合も消極的な場合もあるが，意見の変容を伴う (cf. Smith & Haslam, 2017)。これらに対して，第三の動機による同調行動は意見の変容を伴

わないものの，規範的影響とは異なる影響を適応や精神的健康に対して示すと考えられる。

第三の動機による同調行動は，自らの意見が正しいと認識しながらも，つまり私的意見は変容せずに，他者や集団に利益を提供するために，自らの積極的な選択として行われる。こうした一連のプロセスを考慮すると，第三の動機による同調行動を行う者は，「他者（集団）を助けたい」という動機に基づいて，自ら同調行動を選択しており，これは自律的な動機づけによる他者や集団への向社会的行動であると解釈できる。先行研究において，友人関係への自律的な動機づけが，友人への向社会的行動や関係維持目標などを促進することでポジティブな人間関係を形成し，適応を高めると報告されている（e.g., 岡田, 2005, 2006; Richard & Schneider, 2005）。つまり，自律的動機に基づく対人行動を行うことで，目の前の集団や他者とのポジティブな関わりが生まれ，行為者の適応が高まるのである。同様のことが同調行動にもいえ，受動的な選択としてではなく，自律的な選択として同調行動を行うことで，目の前の集団や他者とのポジティブな関わりが生まれ，同調者の社会的適応や心的適応が高まると予測される。こうした点を踏まえると，第三の動機による同調行動をよく行う者は，適応が高まると予測されるのである。しかし，同調行動に規範的・情報的影響以外でどのような動機があるのかを探索的に検討した先行研究は国内外共に存在せず，同調行動の動機を実際にどれほどの数に分類すべきか不明である。このため，規範的・情報的影響，そして第三の動機を含め，同調行動にどういった動機が存在するのかを丁寧に検討する必要がある[2]。

また，これは心理尺度全体にも言えるが，既存の同調行動を測定する尺度には，妥当性の内容的側面の問題以外にも，その多くが開発・使用の段階で妥当性に関する検討をうけておらず，村山（2012）や仲嶺・上條（2019）の指摘に応えられていないという問題がある。内容的側面の点からは，同調行動の測定尺度の多くが規範的影響に偏って測定しているという問題がある（e.g., 黒沢他, 2002; Mahalik, Locke, Ludlow, Diemer, Scott, Gottfried, & Freitas, 2003）。もちろん，同調行動を規範的・情報的影響に分類して測定する尺度もわずかながら存在する。しかし，海外の研究では特に情報的影響についての研究が経済や商業に関する分野に偏っており（ケイン他, 2021），その尺度も商業やファッションに限定された内容となっている（e.g., Bearden, Netemeyer, & Teel, 1989; Mascarenhas & Higby, 1993）。国内では，広範に規範的・情報的影響を測定する尺度として同調志向尺度を横田・中西（2011）が開発している。とはいえ，この尺度も規範的・情報的影響以外の動機を検討していない点で妥当性の問題を孕んでいる。加えて，この他にも同調行動の測定を試みた様々な尺度が存在するが，「信頼性及び妥当性が確認されている尺度は現在のところみられない」（大西, 2021）。こうした問題点を踏まえ大西（2021）は，青年の自我同一性形成における葛藤としての同調を検討するために，同調的対人態度尺度を開発する際，その尺度の妥当性についてある程度の検討を行った点で評価される。しかし，同調の定義や尺度項目，一因子構造であることなどから，この尺度は規範的影響のみを測定していると考えられる。このように，これまでに開発された同調行動の測定尺度には，そのいずれにおいても，妥当性に関する問題を抱えているといえる。

そこで，本研究では規範的・情報的影響，そして第三の動機を含め，同調行動を動機の観点から多

[2] この段落と前段落の内容は，ケイン他（2021）での主張の概要である。

面的に分類し，測定する新たな尺度，同調動機尺度を開発するための予備的検討を実施する。その際，村山 (2012) や仲嶺・上條 (2019) の主張を踏まえた妥当性の検討を行う。つまり，妥当性の三位一体観に基づく“杓子定規な”妥当性検討ではなく，統合的な構成概念妥当性の証拠を積み重ねていくという立場に則って，同調動機尺度の妥当性を検討する[i]。特に昨今，構成概念の乱立が心理学全体で問題となっていることを踏まえ，仲嶺・上條 (2019) が新たな尺度を作成する際に特に示すべきとする弁別的必要性，利点的必要性を示すことを試みる[ii]。具体的には，以下の 3 つの方法で同調動機尺度の妥当性についての証拠を重ね，同調動機尺度の必要性を示すことを試みる。

まず，自由記述による予備調査を行い，得られた記述を分類することで，一般に人が同調行動を行う際，どのような動機を抱いているのかを検討する。そして，仲嶺・上條 (2019) の指摘を踏まえ，この分類から抽出された各動機について明確な定義を行い，その定義及び調査で得られた記述を基に尺度項目を作成する。このように作成された同調動機尺度について，本研究では適応の指標の一つである精神的健康 (石津・安保, 2008) との関連から，尺度の妥当性について外的側面の証拠を重ねることを試みる。同調行動と適応の関連については，先行研究の結果が一貫しないため予測が立てにくい (cf. ケイン他, 2021)。一方で前述の通り，国内外の様々な研究で規範的影響と精神的健康が負の関連を示していることから，同調動機尺度によって測定される各動機との関連もある程度予測できる。つまり，規範的影響に近似する動機は精神的健康と負の相関を示すと予測する。さらに，第三の動機による同調行動は精神的健康と正の関連を示すと予測する。この予測と一致した結果が示されれば，同調動機尺度の外的側面の証拠を示すことができる。情報的影響と近似する動機については，知見が不足しているため明確な予測を立てない。

次に，同調動機尺度に因子分析を行い，各下位概念と同調志向尺度 (横田・中西, 2011) との関連を検討することで，構造的側面の証拠や，前段落とは異なる視点から外的側面の証拠を重ねることを試みる。構造的側面の証拠としては，同調動機尺度が 3 因子以上の構成になり，規範的・情報的影響以外の因子が抽出されると考える。さらに，同調行動を規範的・情報的影響に弁別する同調志向尺度と，同調動機尺度の因子構造及び各下位概念の関連を比較することで，構造的・外的側面の証拠を補強する。具体的には，規範的影響に近似する動機は同調志向尺度の規範的影響と関連を示し，情報的影響に近似する動機は同調志向尺度の情報的影響と関連を示すと考える。ただし，規範的・情報的影響が理論的にも経験的にも完全に弁別することが難しい (cf. Cialdini & Goldstein, 2004; ケイン他, 2021; 横田・中西 2011) 点を考慮すると，規範的影響に近似する動機は情報的影響とも，また情報的影響に近似する動機は規範的影響とも同時に関連を示すと考えられる。しかし，これらの関連は全て同調行動を測定しているという点で説明可能な程度であり，規範的影響に近似する動機と情報的影響との関連は規範的影響とのものよりも，また情報的影響に近似する動機と規範的影響との関連は情報的影響とのものよりも弱いと考える。一方で，第三の動機による同調行動についても同様に，規範的・情報的影響双方と全ての概念が同調行動であるという点で説明可能な程度の関連を示すと考える。

最後に，同調動機尺度の各動機と精神的健康との関連，及び規範的・情報的影響と精神的健康との関連を比較することで，同調動機尺度の利点的必要性を示すことを試みる。同調動機尺度が，精

神的健康とネガティブな関連を示す同調行動と関連を示さない同調行動，そしてポジティブな関連を示す同調行動を弁別することができる一方で，同調志向尺度ではこれらを弁別できないことが示されれば，同調動機尺度の利点的必要性を示すことが可能となる。

予備調査

予備調査では先行研究 (e.g., 加藤, 2003; 峰尾, 2017; 友野・橋本, 2005) を参考に，同調行動にどのような動機が存在するのかを探索的に検討する。これらは全て尺度開発研究であるが，その際自由記述による調査を用いている。具体的には，尺度作成の前に自由記述による予備調査によって，調査協力者が測定される概念をどのように捉えているのかを検討し，得られた記述を基に実際の尺度項目を作成している。この手法は，調査対象者が測定される概念をどのように捉えているか検討することができ，研究者の主観に基づかず，調査協力者側の視点から尺度を構成することができる点で優れている (cf. 峰尾, 2017; 友野・橋本, 2005)。さらに, Asch の実験パラダイムに対する生態学的妥当性の問題への指摘 (Ross, Bierbrauer, & Hoffman, 1976; Smith & Haslam, 2017) にも対応可能な手法である。そこで，本研究では大学生に対し自由記述調査を行い，同調行動を行う際，具体的にどのような動機が存在しているのか探索的に検討する。

参加者及び手続き　大学生 50 名を対象に自由記述調査を行った。調査は 2017 年 10 月に実施され，質問紙の配布は大学の講義を通して一斉に行い，一部は個別に依頼した。この調査では，「あなたは普段の生活の中で，どのような同調行動を行ったことがありますか？」「その同調行動は，どのような動機で行いましたか？」という質問に対し，自由記述による回答を求めた。

KJ 法を参考にした分類手続き　分類は川喜田・牧島 (1970) を参考に行われた。分類を行ったのは，著者を含めた心理学を専攻する学生 3 名であった。まず，全ての自由記述テキストを印刷し，それぞれの記述の動機側面を取り出した。その後，類似する記述をグルーピングしていった。この際，なぜこの記述をこのグループに含めるのか，含めることを妥当だと考えるか，妥当でないと考えるならなぜかといったことについて 3 名で議論を重ねながら分類していった。複数回この過程を経た結果，全員が納得できる分類に収まった段階で分類を終了した。その後，心理学系教員に結果の確認を得て, K 大学内の発表会にて発表し意見を得た。この際，分類の結果について概ね同意が得られ，得られた指摘については各動機の定義を行う際，参考にした。分類の結果，自由記述から得られた同調行動を行う動機は 5 種類であると仮定された。以下に，各動機の定義を記述する。

リスク回避的動機による同調行動　リスク回避的動機による同調行動(以下，リスク回避的同調行動)とは,「リスクを回避したいという動機から，自らのものとは異なる周囲の意見・態度・行動に合わせる」ことである。自由記述に挙がった動機の例としては,「もめるのが嫌だから」「トラブルになりたくない」「周囲から浮いたり，目立ったりしたくないから」などがある。リスク回避的同調行動は，社会的排斥などの不利益を回避したいという動機である規範的影響と近似した概念である。

社会規範的動機による同調行動　社会規範的動機による同調行動(以下，社会規範的同調行動)とは，「同調者が熟考して決めたわけではなく，周囲の流れのままに，周囲の意見・態度・行動に合わせる」ことである。自由記述に挙がった動機の例としては，「それがルールだから」「当たり前だ

から」「みんながやっている／いないから」などが挙げられる。社会規範的同調行動は，規範に関する同調行動である点で規範的影響と共通点を持つが，回避を前提としないという点で異なっている。

情報入手的動機による同調行動　情報入手的動機による同調行動(以下，情報入手的同調行動)とは,「他者からより正確な情報を得たいという動機から，周囲の意見・態度・行動を自身の判断の根拠として利用し，周囲の意見・態度・行動に合わせる」ことである。自由記述に挙げられた動機の例としては，「どうすればいいかわからないから」「確かな情報が欲しいから」「自分では判断できないから」などが挙げられる。この動機は，現実に即したより妥当な反応をしたいという動機である情報的影響と近似した概念である。

惰性的動機による同調行動　惰性的動機による同調行動(以下，惰性的同調行動)とは,「自ら選択を行いたくないという動機から，周囲の意見・態度・行動に合わせる」ことである。自由記述に挙げられた動機の例としては,「面倒だから」「自分には大して重要ではないから」などが挙げられる。

利益重視的動機による同調行動　利益重視的動機による同調行動(以下，利益重視的同調行動)とは，「他者に利益を与えたいという動機から，周囲の意見・態度・行動に合わせる」ことである。自由記述に挙げられた動機の例としては，「盛り上がると楽しくなるから」「楽しんでほしいと思ったから」などが挙げられる。この動機による同調行動は, Asch (1955) の実験にて,「研究の結果を台無しにしたくなかった」,「みんなの利益に沿うように行動した」と同調した理由を説明している被験者の動機と一致すると考えられる。このため利益重視的同調行動は, Smith & Haslam (2017) が指摘した規範的・情報的影響とは異なる第三の動機であると考えられる。

本調査

予備調査で得た自由記述とその分類結果を基に同調動機尺度を作成した。具体的には, 5 つの動機それぞれに分類された動機のテキストを取り出し，その動機側面の記述とリンクした行動側面のテキストを基本として尺度項目を作成した。動機の分類は，質問紙の動機側面への回答のみを対象に行ったが，尺度項目には動機側面とセットとなる行動側面の例が必要となる。そこで，各動機に分類されたテキストを取り出し，その動機側面と共に回答された行動側面を結合させることで，動機と行動双方を有する尺度項目の基礎とした。こうして作成された項目の基礎には，様々な表記ゆれがあったり，表現が厳密でなかったりといった問題があった。また，自由記述で得られた回答のみから項目を作成するのでは，各動機に該当する項目数に偏りが生じる。こうした問題を解決するため，先行研究 (e.g., 藤原, 2006; 葛西・松本, 2010; 黒沢他, 2002) を参考に，表現の修正，いくつかの項目の追加等を行った。作成された項目内容は Table 1 に記載されている。

本調査の目的は，予備調査で作成した同調動機尺度の必要性及び妥当性についての検討である。このため，本調査では同調動機尺度に加え，精神的健康との関連を検討するために心理的ストレス反応尺度 (鈴木・嶋田・三浦・片柳・右馬埜・坂野, 1997; 以降 SRS-18) を用いた。また，同調動機尺度の妥当性についての外的側面の証拠，及び弁別的・利点的必要性を検討するため，同調志向尺度 (横田・中西, 2011) を用いた。これらに加え，同調動機尺度の妥当性についての外的側面の証拠をより多く重ねるため，同調行動を内面的同調 (仲間への同調因子) と表面的同調 (自己犠牲・追従

Table 1. 新しい同調動機尺度の項目

1)	"普通"や"当たり前"のような、 みんなの期待や基準に従う	21)	みんなともめても問題ないと思うから、 自分の意見をはっきり主張する
2)	自分の意見や考えがそこまで強くないときは、 みんなの意見に合わせた方が楽なのであわせる	22)	みんなを喜ばせたり楽しませたりしたいと思わないので、 みんなにあわせない
3)	本心を出すことをみんなに期待されていない と思うので、みんなの前では自分を抑える	23)	友人の話に共感していなくても、 相手のガス抜きになればいいなと思って相手に反応をあわせる
4)	自分には害がなさそうなことであれば、 みんなにあわせる	24)	みんなが"正しい"と思うことは実際に"正しい"ことである場合 が多いので、自分もそれにあわせる
5)	先生から質問されて、答えが分からないとき、 自分より前に回答した人達と同じ答えを回答する	25)	流行に後れたくないので、自分の好みとは違っても流行の服を買っ たり、必要ではないが流行りのアプリをダウンロードしたりする
6)	自分で決めるのが面倒だから、みんなにあわせる	26)	先輩や目上の人と話すときなどには、 言葉遣いや礼儀・マナーなどにかなり気を遣う
7)	自分の考えていた答えとみんなの答えが違っても、 自分の答えをそのままにしておく	27)	トラブルにならなくて楽だと思うから、 みんなの意見や行動にあわせる
8)	特にやりたいことがないときは、 みんなのやりたいことをやる	28)	寂しい思いをしなくて済むから、みんなと一緒にいる
9)	授業を一人で受けるよりも楽しいと思うから、 みんなと同じ授業を受ける	29)	目的地までの道のりが分からないとき、 なんとなく周りの人の流れに乗る
10)	恥をかきたくないから、みんなと同じ意見を言う	30)	みんなが高く評価しているお店や商品は、 本当に良いものなのだと思うので利用する
11)	意見を出すのが面倒だから、みんなの意見にあわせる	31)	話し合いでみんなと意見が違ったとき、 もめるのがイヤだからみんなに意見をあわせる
12)	悲しんでいる友達をみんなで慰めているとき、 その悲しみを解消してあげるために一緒に慰める	32)	周囲から浮いたり目立ったりしたくないから、 みんなにあわせる
13)	自分以外が満場一致で話がまとまりそうなとき、 みんなに迷惑をかけたくないので意見を言わない	33)	自分にとって大して重要ではないことを決めるときは、 みんなの意見に合わせた方が楽でいいと思う
14)	どんな些細なことでも、自分に関わることは重要なので、 みんなと意見が違ってもきちんと自分の意見を言う	34)	一緒にいて楽しかったり、居心地が良かったりするから、 みんなと一緒にいる
15)	みんなにあわせた方が場の雰囲気を壊さなくて済む ことが多いので、みんなにあわせる	35)	周りに人がいると、規則に違反するような行動を控える
16)	出かけるときや外食に行くとき、確かな情報が欲しいので、雑誌や テレビ・口コミなどを参考にして行き先を決める	36)	どのように振る舞っていいかわからないとき、 みんなの行動を参考にする
17)	自分に悪いイメージがつくのではないかと不安なので、 みんなにあわせる	37)	独りぼっちだと思われたくないから、みんなの近くにいる
18)	みんなの意見に納得できないときは、たとえ場の雰囲気が悪くなっ たり、みんなの迷惑になったりしても、自分の意見をはっきり言う	38)	自分に特に意見がないときは、みんなの意見にあわせる
19)	自分では決めることができないとき、みんなの考えにあわせて 決めたり、みんなに判断をゆだねたりする	39)	みんなに会話を楽しんでほしいから、みんなに話をあわせる
20)	自分が対象になるのが嫌なので、誰かがからかわれていたり陰 口を言われていたりしても止めない	40)	場が盛り上がると楽しいから、みんなにあわせる

因子) に弁別して測定する同調行動尺度 (葛西・松本, 2010) も用いた。

同調行動には動機以外にも，同調者が同調対象である周囲の意見・態度・行動に対し，どの程度納得 (compliance; Cialdini & Goldstein, 2004) しているかという観点による分類，内面的同調と表面的同調がある。内面的同調行動とは内心から他者の意見や行動を受け入れることであり，表面的同調とは表面的には同調しているように見えるが内面では異なっていることである (e.g., 藤原, 2006; 葛西・松本, 2010)。Cialdini & Goldstein (2004) 曰く，同調する際に同調者が多数派の意見に強く反対していた場合，多数派からの逸脱を避けたいという同調者の動機が同調行動を引き起こす傾向がある。一方で，同調者が多数派の意見にそれほど強く反対していない場合には，多数派の意見を，客観

的なコンセンサスを表していると見なす傾向があるとされる。つまり，表面的同調 (納得していない同調行動) は規範的影響と関連し，内面的同調 (納得した上での同調行動) は情報的影響と関連していると考えられる。同様の傾向が同調動機尺度においても示されれば，各動機が予測と合致した傾向を持つことが示され，同調動機尺度の外的側面の証拠をより多く重ねることができる。

方 法

参加者及び手続き　大学生 273 名 (男性 135 名，女性 136 名，無回答 2 名) に調査を実施し，回答に不備があった 9 名を除く 264 名 (男性 128 名，女性 134 名，無回答 2 名) を分析対象とした。平均年齢は 19.32 歳 (SD = 1.15) であった。調査は 2017 年 11 月に実施され，質問紙の配布は大学における講義を通して一斉に行い，一部は個別に依頼した。

倫理的配慮　調査の実施前に，本調査への参加は自由参加であり，いつでも自由に参加を取りやめられること，回答しないことによって一切不利益は発生しないこと，回答内容はデータ化され個人が特定できない形に変換されること，対象者が直接回答した質問紙は統計的な処理ののち速やかに処分されること，そのデータに関係する発表では決して個人が特定できない形で行うことを調査対象者に口頭で説明した。また，ほぼ同様の文章が質問紙の表紙にも記載されていた。

質問紙　今回のアンケートが「普段あなたがとっている様々な行動や，普段あなたが感じている様々な感情についてお尋ねするもの」だと教示した上で，尺度への回答を求めた。なお，質問紙の表紙には回答時の留意事項に加え，性別・年齢・所属学部を記入する欄を設けた。各尺度の教示文は以下に記載する。また，同調動機尺度と SRS-18 については全員に回答を求めたが，回答者の負担を考慮し，同調志向尺度は 81 名，同調行動尺度は 91 名に回答を求めた。さらに，2 名の対象者については同調動機尺度には回答したが，その他の尺度には回答しなかった。この 2 名については，同調動機尺度以外の尺度との関連を検討する分析においては除外した。

同調動機尺度：「"普段のあなたの生活"で以下の項目の内容の"行動"をあなたはどの程度行っていますか？『1:全くしていない』～『6:いつもしている』の中から，最も当てはまる数字を 1 つだけ○で囲んで下さい。」

同調志向・行動尺度：「以下の項目は，あなたの普段の行動・感じていることにどの程度あてはまりますか？　『1:全くあてはまらない』～『6:非常にあてはまる』の中で，最もあてはまる数字をひとつ選んでください。」

SRS-18：「以下にあげる項目は，あなたのここ 2, 3 日の感情や行動の状態にどの程度当てはまりますか？　『1:全くあてはまらない』～『6:非常にあてはまる』の中で，最もあてはまる数字をひとつ選んでください。」

結果

同調動機尺度の因子構造の検討　分析には R version 4.0.1 (R Core Team, 2020) を用いた。調査対象者の回答に基づき，最小二乗法 (プロマックス回転) による探索的因子分析を行い，因子数は平行分析を用いて選定した。項目選定の基準として，いずれかの因子に.30 以上の因子負荷量を示した

Table 2. 同調動機尺度の最小二乗法による探索的因子分析における因子負荷量

		因子負荷量				
		1	2	3	4	5
リスク回避的同調行動						
31	話し合いでみんなと意見が違ったとき、もめるのがイヤだからみんなに意見をあわせる	**.772**	-.080	.211	-.098	.066
15	みんなにあわせた方が場の雰囲気を壊さなくて済むことが多いので、みんなにあわせる	**.658**	-.119	.109	-.054	.153
3	本心を出すことをみんなに期待されていないと思うので、みんなの前では自分を抑える	**.623**	-.007	-.073	-.076	-.036
20	自分が対象になるのが嫌なので、誰かがからかわれていたり陰口を言われていたりしても止めない	**.572**	.045	-.031	.096	-.190
27	トラブルにならなくて楽だと思うから、みんなの意見や行動にあわせる	**.534**	-.128	.020	.111	.179
13	自分以外が満場一致で話がまとまりそうなとき、みんなに迷惑をかけたくないので意見を言わない	**.459**	-.180	.023	.252	.001
主張性						
14	どんな些細なことでも、自分に関わることは重要なので、みんなと意見が違ってもきちんと自分の意見を言う	-.220	**.634**	.083	.100	.027
18	みんなの意見に納得できないときは、たとえ場の雰囲気が悪くなったり、みんなの迷惑になったりしても、自分の意見をはっきり言う	-.171	**.595**	.090	.099	-.228
21	みんなともめても問題ないと思うから、自分の意見をはっきり主張する	-.080	**.554**	-.019	-.134	-.016
7	自分の考えていた答えとみんなの答えが違っても、自分の答えをそのままにしておく	.039	**.496**	-.020	.033	.047
孤立回避的同調行動						
12	悲しんでいる友達をみんなで慰めているとき、その悲しみを解消してあげるために一緒に慰める	-.091	.067	**.629**	-.172	.128
34	一緒にいて楽しかったり、居心地が良かったりするから、みんなと一緒にいる	-.078	-.098	**.617**	.293	-.238
30	みんなが高く評価しているお店や商品は、本当に良いものなのだと思うので利用する	.184	.068	**.599**	-.122	.040
28	寂しい思いをしなくて済むから、みんなと一緒にいる	-.200	**-.380**	**.573**	.047	.030
16	出かけるときや外食に行くとき、確かな情報が欲しいので、雑誌やテレビ・口コミなどを参考にして行き先を決める	.186	.180	**.364**	.024	.029
社会規範的同調行動						
36	どのように振る舞っていいかわからないとき、みんなの行動を参考にする	-.175	-.089	-.025	**.919**	-.047
38	自分に特に意見がないときは、みんなの意見にあわせる	.196	.012	.018	**.689**	-.022
33	自分にとって大して重要ではないことを決めるときは、みんなの意見に合わせた方が楽でいいと思う	.268	-.007	-.051	**.664**	-.080
35	周りに人がいると、規則に違反するような行動を控える	.065	.016	-.082	**.543**	.122
23	友人の話に共感していなくても、相手のガス抜きになればいいなと思って相手に反応をあわせる	.038	.083	-.069	**.328**	.159
26	先輩や目上の人と話すときなどには、言葉遣いや礼儀・マナーなどにかなり気を遣う	-.130	.067	.078	**.312**	.104
利益重視的同調行動						
39	みんなに会話を楽しんでほしいから、みんなに話をあわせる	-.084	-.042	.075	.147	**.828**
40	場が盛り上がると楽しいから、みんなにあわせる	-.030	-.035	.040	.213	**.746**

Table 3. 各下位尺度の記述統計

	N	項目数	Mean	*SD*	*α*	*q*
リスク回避的同調行動得点	264	6	24.02	4.95	.83	-
社会規範的同調行動得点	264	6	27.53	4.10	.75	-
利益重視的同調行動得点	264	2	8.48	2.10	.90	.90
孤立回避的同調行動得点	264	5	20.12	4.24	.68	-
主張性得点	264	4	13.80	3.30	.72	-
仲間への同調得点	91	12	37.95	9.26	.83	-
自己犠牲・追従得点	91	10	38.63	8.44	.88	-
規範的影響得点	81	13	50.37	9.72	.87	-
情報的影響得点	81	9	32.00	6.52	.72	-
抑うつ・不安得点	262	6	18.25	7.34	.89	-
不機嫌・怒り得点	262	6	16.19	6.92	.89	-
無気力得点	262	6	19.21	7.12	.84	-

項目を採用した。また，どの因子にも負荷量が低い項目，2 因子以上に高い負荷量を示し，かつその負荷量の差が絶対値.10 未満の項目は削除した。さらに，各因子に負荷量の高い項目群について Cronbach の α 係数を求め，信頼性を著しく損なう項目は削除した。結果，5 因子 23 項目が抽出された。分析の詳細は Table 2 に，記述統計は Table 3 に，因子間相関は Table 4 に記載している。

因子 1 からの高い負荷量を示した項目は，同調しないことによるリスクなどを回避する目的で同調行動を行うような項目だった。そのため，因子 1 は「リスク回避的同調行動」因子であるとした。

因子 2 からの高い負荷量を示した項目は，全て他の因子に負荷すると想定されていた逆転項目だった。そのため因子 2 は，同調行動に対立する概念を表すものとして「主張性」因子と命名した。

因子 3 には，因子 2 と同様に他の因子に負荷すると推測されていた項目の負荷が高かった。この因子は，「周囲と同一でありたい」「一人になりたくない」といったニュアンスを含む項目の集合によって構成されている。こうした特徴から，因子 3 は「孤立回避的同調行動」因子と命名した。

因子 4 からの高い負荷量を示した項目には，項目 36「どのように振る舞っていいかわからないとき，みんなの行動を参考にする」をはじめ，項目 38 や 33 などの情報入手的・惰性的同調行動の因子を構成すると考えられていた項目が含まれていた。しかし，同一因子内に項目 35「周りに人がいると，規則に違反するような行動を控える」や項目 26「先輩や目上の人と話すときなどには，言葉遣いや礼儀・マナーなどにかなり気を遣う」といった社会規範的同調行動の因子を構成すると考えられていた項目も含まれていた。これらの項目を，「面倒だから」「意見がないから」といった動機による，もしくは「無知・未知である」ための行動と解釈するには無理があると考えられる。しかし項目 36 は，周囲から振る舞いという規範を取り入れる行動だと解釈することもできる。また項目 38 も，そもそも周囲に合わせるべきという規範があったと仮定すると，規範を取り入れた結果だと解釈できる。こうした解釈可能性の観点から因子 4 は「社会規範的同調行動」因子であるとした。

因子 5 に負荷した 2 項目は利益重視的同調行動因子を構成すると考えられていた項目である。そのため，因子 5 は「利益重視的同調行動」因子であるとした。

同調動機尺度以外の各尺度について　同調動機尺度以外の尺度については，先行研究と同一の構

Table 4.各下位尺度間の相関関係

因子	リスク回避的同調行動	社会規範的同調行動	利益重視的同調行動	孤立回避的同調行動	主張性	規範的影響	情報的影響	仲間への同調	自己犠牲・追従
社会規範的同調行動	.454**	-	-	-	-	-	-	-	-
利益重視的同調行動	.421**	.540**	-	-	-	-	-	-	-
孤立回避的同調行動	.211**	.314**	.426**	-	-	-	-	-	-
主張性	-.522**	-.171**	-.174**	-.093	-	-	-	-	-
規範的影響	.772**	.458**	.618**	.358**	-.537**	-	-	-	-
情報的影響	.334**	.211	.602**	.688**	-.217*	.625**	-	-	-
仲間への同調	.404**	.225*	.410**	.493**	-.358**	-	-	-	-
自己犠牲・追従	.824**	.507**	.544**	.255*	-.545**	-	-	.501**	-
抑うつ・不安	.191**	.030	.075	.048	-.102	.176	.105	.331**	.331**
不機嫌・怒り	.098	-.031	-.006	.003	-.052	.049	.133	.298**	.258*
無気力	.232**	.078	.095	-.043	-.086	.363**	.191	.266*	.441**

*p <.05, **p <.01

造を想定した確認的因子分析を行ったが，その全てで適合度が基準値 (CFI=.90 以上, RMSEA=.10 未満, SRMR=.10 未満) を満たさなかった。しかし本研究の目的に照らし，これらの因子構造を探索的に検討する必要性は低いと考え，先行研究の項目群で項目分析を行った。その際，著しく α 係数を損なう項目を削除し，残った項目の得点を合計して各下位尺度得点とした。Table 3 には各下位尺度の記述統計や α 係数, Spearman - Brown の信頼性係数 (q) を記載している。

同調動機尺度の必要性及び妥当性の証拠についての検討　相関分析の結果 (Table 4)，主張性が全ての動機と負の相関を示した。この結果から，主張性は同調行動と対極的な概念であると考えられる。本研究及び同調動機尺度の目的は，同調行動を動機に基づいて分類することであり，主張性はその目的からは外れている。このため以降，主張性に関する考察については記述しない。

まず，リスク回避的及び社会規範的同調行動は規範的影響と強い正の相関 (r=.772, r=.458, p<.01) を示した。同時に，リスク回避的同調行動は情報的影響とも有意な正の相関 (r=.334, p<.01) を示している。そこで相関係数の差の検定を行ったところ，情報的影響に比べ規範的影響との関連の方が有意に強いことが示された (p<.01)。このため，リスク回避的同調行動が示した情報的影響との関連は，どちらも同調行動を測定していることによると考えられる。

一方で，孤立回避的同調行動は，情報的影響と強い正の相関 (r=.688, p<.01) を示している。この因子は，規範的影響とも有意な正の相関を示しているが，相関係数の差の検定により，規範的影響に比べ情報的影響との関連の方が有意に強いことが示された (p<.01)。この結果から，孤立回避的同調行動が示した規範的影響との関連は，どちらも同調行動を測定していることによると解釈できる。

さらに，利益重視的同調行動は規範的影響と情報的影響双方と正の相関 (r=.618, .602, p<.01) を示したが，規範的・情報的影響との関連の間には有意な係数の差は見られなかった。このため，利益重視的同調行動が規範的・情報的影響双方との間に示した関連は，いずれの下位尺度も同調行動を測定していることによるものであり，利益重視的同調行動は規範的・情報的影響双方のどちらにも偏っていない概念であると考えられる。

次に同調動機尺度の下位尺度と精神的健康との関連を検討したところ，リスク回避的同調行動が SRS-18 の下位尺度のうち，抑うつ・不安と無気力に正の相関(r=.191, .232, p<.01) を示した。一方で，同調動機尺度の下位尺度の内，リスク回避的同調行動以外の下位尺度は全て SRS-18 と有意な関連を示さなかった。また，規範的影響は無気力と正の相関を示した (r=.363, p<.01) が，情報的影響は SRS-18 と有意な関連を示さなかった。

同調動機尺度と同調行動尺度の関連についての検討　相関分析の結果 (Table 4)，リスク回避的同調行動は仲間への同調と自己犠牲・追従双方に正の相関 (r=.404, r=.824, p<.01) を示した。また，社会規範的同調行動も同様に仲間への同調と自己犠牲・追従双方に正の相関 (r=.225, p<.05, r=.507, p<.01) を示し，利益重視的同調行動も仲間への同調と自己犠牲・追従双方に正の相関 (r=.410, .544, p<.01) を示した。相関係数の差の検定の結果，いずれの因子についても仲間への同調に比べ自己犠牲・追従との関連が有意に強いことが示された (p<.01)。一方で，孤立回避的同調行動も仲間への同調と自己犠牲・追従双方に正の相関 (r=.493, p<.01, r=.255, p<.05) を示したが，相関係数の差の検定の結果，自己犠牲・追従に比べ仲間への同調との関連が有意に強いことが示された (p<.01)。

考 察

同調動機尺度に対する因子分析と各下位尺度間の相関分析の結果，規範的影響と関連するリスク回避的同調行動と社会規範的同調行動，情報的影響に関連する孤立回避的同調行動，そして規範的・情報的影響どちらとも異なる第三の動機である利益重視的同調行動の抽出に成功した。この結果から，同調動機尺度が規範的・情報的影響及び第三の動機を測定可能であるという構造的・外的側面の証拠と，同調志向尺度に比べ同調動機尺度が弁別的必要性を持つことが示されたといえる。

さらに，リスク回避的同調行動が抑うつ・不安と無気力に正の相関を示したという結果は，規範的影響による同調行動が精神的健康と負の関連を示すという先行研究の結果と一致する。しかし，社会規範的同調行動は SRS-18 と有意な関連を示していない。この結果から，規範的影響であっても必ずしも精神的健康とネガティブな関連があるとは限らず，回避したい不利益があるか否かが大きな影響を与えていると考えられる。さらに，規範的影響に近似するリスク回避的同調行動は精神的健康と負の関係を持つが，それ以外の動機と精神的健康は関係しないことが示唆された。こうした結果から，同調動機尺度の関連的・弁別的必要性と外的側面の証拠がある程度示されたといえる。

また，規範的影響に関連するリスク回避的同調行動と社会規範的同調行動が自己犠牲・追従と強く関連し，情報的影響と関連する孤立回避的同調行動が仲間への同調と強く関連することが示された。この結果は，表面的同調は規範的影響と関連し，内面的同調は情報的影響と関連するという予測と一致する結果である。さらに，利益重視的同調行動が自己犠牲・追従と関連した点は，Smith & Haslam (2017) が指摘した第三の動機の特徴と一致する。これらの結果から，同調動機尺度の外的側面の証拠をより多く重ねることができたといえる。

一方で，利益重視的同調行動は予測に反し，SRS-18 と負の関連を示さなかった。また，規範的影響は無気力と正の相関を示したが，情報的影響は SRS-18 と有意な関連を示さなかった。この結果を踏まえると，同調動機尺度と同調志向尺度共に，精神的健康とネガティブな関連を示す同調行動と，関連を示さない同調行動の弁別を行うことができるといえる。このため，同調動機尺度の利点的必要性を強固に示すことはできなかった。さらに，当初想定していた下位概念のうち，惰性的同調行動と情報入手的同調行動が抽出されなかった。また，逆転項目が集合した主張性が抽出され，想定していなかった孤立回避的同調行動が抽出された。このため，同調動機尺度の妥当性における構造的・外的側面の証拠については，一定程度は示されたが，予測と完全には一致しなかったといえる。

今後の課題

今後の課題として，主に以下の 2 点が挙げられる。1 点目は，今回抽出された因子構造が再度抽出されるのかを検討し，同調動機尺度の構造的側面の証拠を重ねる必要がある点である。本研究の分析の結果，情報入手的同調行動と惰性的同調行動は抽出されず，孤立回避的同調行動という新たな動機が抽出された。さらに，逆転項目が集合した主張性が抽出され，想定されていた因子構造は完全には抽出されなかった。しかし，予備調査の結果を考慮すると，本調査の結果のみで同調動機尺度の因子構造を判断することは性急かもしれない。最も大きな原因として考えられる要因は本調査でのサンプルサイズの少なさである。因子分析を行う際には，少なくとも尺度の項目数×10 のサン

プルサイズが必要とされている (cf. Kyriazos, 2018)。本研究での分析対象者は 264 名であり，これは 40 項目に及ぶ同調動機尺度の因子分析を行うには明らかな不足である。適正な結果を示すためには，少なくとも 400 名以上のサンプルサイズが必要であるといえる。このため，今一度十分なサンプルサイズを確保した状態で，本研究での因子構造が再度確認されるのか，または他の構造が確認されるのか，再度分析を行う必要がある。特に，新たな動機である孤立回避的同調行動については，再抽出されるのかを検証する必要がある。そしてもし，再抽出されるのであれば，明確な定義づけを行い，新たな同調動機として組み込む必要があるだろう。

2 つ目は，精神的健康との関連からでは，利益重視的同調行動の外的側面の証拠，及び同調動機尺度の利点的必要性を強固に示すことができなかったため，適応との関連を直接的に検討することで，外的側面の証拠と利点的必要性を示すことを試みる必要がある点である。本研究では，同調行動と適応の関連については，先行研究の結果が一貫しないため予測が立てにくい一方で，精神的健康に関しては先行研究の結果から関連が予測できるという点，及び精神的健康が適応の指標の一つである (石津・安保, 2008) とされていることを踏まえ，同調動機尺度と適応の関連を直接的に検討するのではなく，同調動機尺度と精神的健康との関連を検討することで，利益重視的同調行動の外的側面の証拠と同調動機尺度の利点的必要性を示すことを試みた。分析の結果，本研究では利益重視的同調行動が SRS-18 と負の関連を示さなかったため，これらを十分に示すことができなかった。このため，同調動機尺度と同調志向尺度について，適応感との関連を直接的に比較し検討することで，今一度これらを示すことを試みる必要がある。

引用文献

Asch, S. (1955). Opinions and social pressure. *Scientific American*, *193*, 31-35.

Bearden, W, O., Netemeyer, R, G. & Teel, J, E. (1989). Measurement of Consumer Susceptibility to Interpersonal Influence. *Journal of Consumer Research*, *15*, 473–481.

Bond, R. (2005) Group Size and Conformity. *Group Processes & Intergroup Relations*, *8*, 331-352.

Cialdini, R., & Goldstein, N. (2004). Social Influence: Compliance and Conformity. *Annual Review of Psychology*, *55*, 591-621.

Deutsch, M., & Gerard, H. (1955). A Study of Normative and Informational Social Influence Upon Individual Judgment. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, *51*, 629-639.

藤原正光 (2006). 同調行動志向尺度・個人行動志向尺度作成の試み(1)―大学生による小 5 時代の回想から 文教大学教育学部紀要, *40*, 1-9.

Hamilton, C., & Mahalik, J. (2009). Minority Stress, Masculinity, and Social Norms Predicting Gay Men's Health Risk Behaviors. *Journal of Counseling Psychology*, *56*, 132–141.

石丸径一郎 (2011). 調査研究の方法 下山晴彦 (編) 臨床心理学研究法, *5*, 新曜社.

石津憲一郎・安保英勇 (2008). 中学生の過剰適応傾向が学校適応感とストレス反応に与える影響 教育心理学研究, *56*, 23-31.

ケイン聡一・小池真由・中島健一郎 (2021). 同調行動研究のこれまでとこれから: 動機に着目する

必要性 広島大学心理学研究, *20*, 121-132.

葛西真記子・松本麻里 (2010). 青年期の友人関係における同調行動:同調行動尺度の開発 鳴門教育大学研究紀要, *25*, 189-203.

加藤　司 (2003). 大学生の対人葛藤方略スタイルとパーソナリティ，精神的健康との関連性について 社会心理学研究, *18*, 78- 88.

川喜田二郎・牧島信一 (1970). 問題解決学 KJ 法ワークブック 講談社.

北村英哉・大坪庸介 (2012). 進化と感情から解き明かす社会心理学 有斐閣, 175-206.

黒沢幸子・森 俊夫・寺崎馨章・大場貴久・有本和晃・張替裕子 (2002).「ギャング」「チャム」「ピア」グループ概念を基にした「仲間関係発達尺度」の開発ースクールカウンセリング包括的評価尺度(生徒版)の開発の一環として 明治安田こころの健康財団研究助成論文集, *38*, 38-47.

Kyriazos, A. (2018). Applied Psychometrics: Sample Size and Sample Power Considerations in Factor Analysis (EFA, CFA) and SEM in General. *Psychology*, *9*, 2207-2230.

Mahalik, J. R., Locke, B. D., Ludlow, L. H., Diemer, M. A., Scott, R. P. J., Gottfried, M., & Freitas, G. (2003). Development of the Conformity to Masculine Norms Inventory. *Psychology of Men & Masculinity*, *4*, 3–25.

Mascarenhas, O, A, J. & Higby, M, A. (1993). Peer, Parent, and Media Influences in Teen Apparel Shopping. *Journal of the Academy of Marketing Science*, *21*, 53-58.

峰尾菜生子 (2017). 大学生における日本社会に対する社会観の特徴―自由記述に基づく社会観尺度の作成と妥当性の検討― 青年心理学研究, *28*, 67-85.

村山 航 (2012). 妥当性概念の歴史的変遷と心理測定学的観点からの考察 教育心理学年報, *51*, 118-130.

仲嶺 真・上條菜美子 (2019).「心理学研究」の新心理尺度開発論文に記載された尺度開発の必要性 心理学研究, *90*, 147-155.

岡田 涼 (2005). 友人関係への動機づけ尺度の作成および妥当性・信頼性の検討 －自己決定理論の枠組みから－ パーソナリティ研究, *14*, 101-112.

岡田 涼 (2006). 自律的な友人関係への動機づけが自己開示および適応に及ぼす影響 パーソナリティ研究, *15*, 52-54.

大久保智生・青柳 肇 (2003). 大学生用適応感尺度の作成の試み － 個人-環境の適合性の視点からパーソナリティ研究, *12*, 38-39.

大西将史 (2021). 青年期における自我同一性と同調的対人態度:同調的対人態度尺度の作成と多次元自我同一性尺度との関連性の検討. 福井大学教育実践研究, *45*, 123-128.

R Core Team (2020). R: A Language and Environment for Statistical Computing. *R Foundation for Statistical Computing*, Vienna, Austria. URL https://www.R-project.org/.

Richard, J., & Schneider, B. (2005). Assessing Friendship Motivation During Preadolescence and Early Adolescence. *Journal of Early Adolescence*, *25*, 367-385.

Ross, L., Bierbrauer, G. & Hoffman, S. (1976). The Role of Attribution Processes in Conformity and Dissent Revisiting the Asch Situation. *American Psychologist*, *31*, 148-157.

Smith, J., & Haslam, A. (Eds.) (2012). Social Psychology: Revesting the Classic Studies. *SAGE*. (スミス, J.　ハスラム, A. (Eds.) 樋口匡貴・藤島喜嗣 (監訳) (2017). 社会心理学・再入門―ブレークスルーを生んだ 12 の研究　新曜社.)

鈴木伸一・嶋田洋徳・三浦正江・片柳弘司・右馬埜力也・坂野雄二 (1997) 新しい心理的ストレス反応尺度(SRS-18)の開発と信頼性・妥当性の検討 行動医学研究, *4*, 22-29.

友野隆成・橋本　宰 (2005). 改訂版対人場面におけるあいまいさへの非寛容尺度作成の試み [1] パーソナリティ研究, *13*, 2020-230.

Wong, Y. J., Ho, M.-H. R., Wang, S.-Y., & Miller, I. S. K. (2017). Meta-Analyses of the Relationship Between Conformity to Masculine Norms and Mental Health-Related Outcomes. *Journal of Counseling Psychology*, *64*, 80–93.

横田晋大・中西大輔 (2011). 同調志向尺度の開発 －規範的影響と情報的影響－ 広島修道大学論文集, *51*, 23-35.

依藤佳世 (2003) 子どものごみ減量行動に及ぼす親の社会的影響 廃棄物学会論文誌, *14*, 166-175.

湯川慎太郎・吉田富二雄 (Eds.) (2012). ライブラリ スタンダード心理学＝８ スタンダード社会心理学 サイエンス社.

---

[i] 村山 (2012) は，妥当性の三位一体観 (収束的妥当性と弁別的妥当性，内容的妥当性を妥当性のタイプとして記述すること) を批判し，統合的な「構成概念妥当性」という考え方を支持している。この考え方では，これまで「異なるタイプ」として見なされてきた様々な妥当性の観点が，構成概念妥当性を確かめるための証拠として捉えられる。これは，これまで基準関連妥当性や内容的妥当性，因子的妥当性や信頼性として個別に扱われてきたものの全てを，それぞれ単独の妥当性としてではなく，心理尺度の解釈をより適切なものにするための証拠の一つとして扱えることを意味する。こうなると逆に，妥当性の三位一体観を形作る 3 種類の妥当性を検討しただけで「妥当性が確かめられた」とは表現できない。このため，論文においても「××の傾向を測定するものとして，○○の尺度のテスト得点の妥当性を△△程度確かめることができた」というような表現が適切となる。

[ii] 仲嶺・上條 (2019) は昨今,「構成概念の乱立」が心理学全体で問題となっていることを指摘し，新たな尺度を作成する際に示すべき三つの「必要性」を示すことが重要だと述べている。一つ目は，ある構成概念 (心理現象，行動，生物学的実体等) を測定する，あるいはそれと関連するために新しい構成概念が重要で，それを測定するための新しい心理尺度が必要であるという「関連的必要性」である。例えば，新しい構成概念 A が精神的健康と関連するなどがこれにあたる。ただし，関連的必要性を示すことについては，妥当性の検討を行うために特定の概念との関連を検討している点で，容易に達成可能であると考えられる。また，構成概念の明確な定義を行う必要もある。二つ目は，既存の類似の構成概念とは異なる側面を新しい構成概念が記述しているために，その測定のための新しい尺度が必要であるという「弁別的必要性」である。例えば，新しい構成概念 A は既存の構成概念 B と何々の点で類似するが，何々の点では異なるなどがこれに当てはまる。三つ目は，新しい構成概念の方が既存の構成概念よりも利点があるために (石丸，2011)，その測定のための新しい心理尺度が必要であるという「利点的必要性」である。例えば，構成概念 A は既存の構成概念 B よりも抑うつを強く予測するなどがこれにあたる。